万葉集の風土

桜井満

万葉集の風土

昭和五二年一二月二〇日第一刷発行　昭和五三年一二月一五日第三刷発行

定価——三九〇円

著者——桜井満

© Mitsuru Sakurai 1977 Printed in Japan

発行者——野間省一　発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二　電話〇三—九四五—一二一一　振替東京八—三九三〇

装幀者——杉浦康平＋鈴木一誌

印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂

0291-158934-2253(0)

落丁本・乱丁本はおとりかえします（学一）

万葉集の風土

桜井満

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

講談社現代新書

はじめに

万葉の時代は、律令制を基盤とする古代国家が誕生した時代である。そうした民族の若々しい情熱によって力強く歌いあげられた歌の世界が『万葉集』にはある。漢詩文の影響を受けながら、それに侵されること少なく、仏教美術の黄金時代でありながら、仏教の影響もまた薄く、民族的抒情の世界から生活に即した個人的抒情の詩まで伝えられる。短歌を中心にした日本の伝統的な歌に、伝統的な心情や文化や生活が表現されているのだ。『万葉集』は〈万葉和歌集〉と命名されなかったところに日本的な風土が認められるのであった。そしてそれは大和を中心にした風土であった。

「風土」という言葉の歴史は古い。和銅六年(七一三)の詔によって撰進された『風土記』があり、万葉にも「風土」という言葉が大伴家持によって用いられている。みやびの目を通して越中の風土がみつめられ、ひなにいて大和の風土が顧みられているのであって、それは気候と土地のありさまというくらいの意味で使われている。

しかし文学的な問題として扱われる「風土」は、その土地を形成する自然地理的なありさま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

より、自然と人間の相互作用である、いわば人文地理的な風土がより重要である。地理的なものに、精神的な、歴史的な、あるいは文化的な風土が一切綜合されなければならないはずだ。〈万葉の風土〉というのは、万葉びとの生活と歌に直接関連をもつ生きた自然であり、そこに歌が形成される必然の基盤である。〈『万葉集』の風土〉は、さらに『万葉集』が内包する世界であり、環境であるといえよう。

わたくしの『万葉集』への歩みは、高崎正秀先生に師事し、折口信夫の国学の道統を追蹤して、古典を読み、民俗採訪による実感をつちかう一方、古代の史料を正視してきたところにある。

わたくしは万葉の歌をはじめから文学であると決めこんでしまわない。だからといって、日本人の生活の歴史を跡付け、民族の文化や性格を明らかにする民俗学の資料と決めてしまうわけでもなく、ましてや歴史を彩るものとしてみようというのでもない。いわゆる民俗学的な立場に立つこというまでもないが、とくに「文学」と「民俗」に「歴史」を加えた鼎に、『万葉集』をのせてみるのである。そして、どのようであるかを述べ、なぜであるかを説く根本に、『万葉集』とは何か、そこにある歌は何か、その作者は何者か——、という問いをもっているつもりである。

さて、本書をまとめるきっかけは樋口清之博士に与えられたものであり、それをこの講談社現代新書にお薦め下さったのは水野祐早大教授であった。この、考古学を軸に、また古代史学を基盤に、まことに柔軟な幅広い学問を展開しておられる両碩学のお目にとめていただいたことは、わたくしにとって無上の喜びである。そして講談社学芸図書第一出版部長渋谷裕久氏のお心のこもった助言と激励にも、担当して下さった鈴木理氏の細心の御配慮にも、ここに合わせて感謝申しあげたい。

昭和五十二年十一月

桜井　満

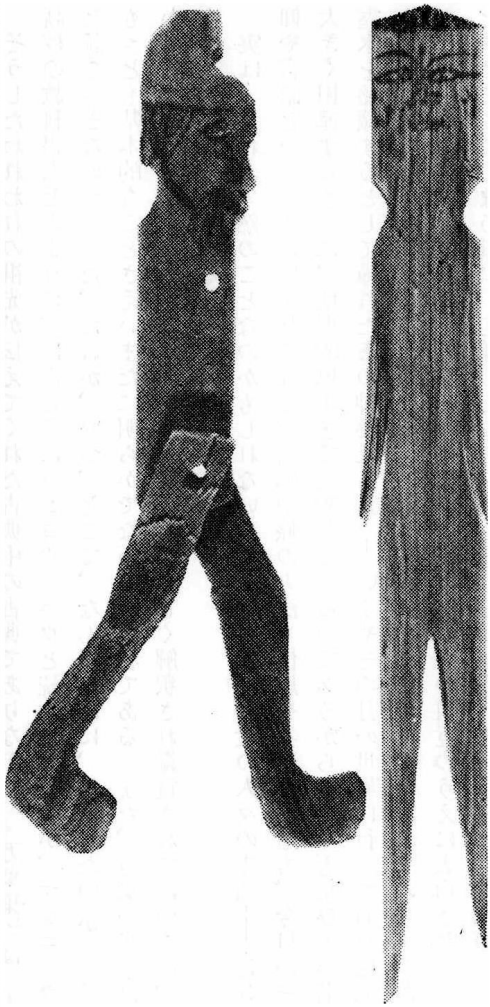
目次

はじめに 3
序章―天の香具山の風土―『万葉集』をどう読むか 9
第1章―巻頭歌と巻末歌と―『万葉集』成立の背景 23
1―巻頭歌の意義―万葉の時代 24
2―いやしけ吉事―『万葉集』の生成 32
第2章―悲劇の皇子の歌物語―歌物語伝承の基盤 45
1―有間皇子の「結び松」 46
2―大津皇子の悲劇 61

第3章―壬申の乱前後―「万葉の時代」の激動期―――75
1―大和三山の歌　76
2―「むらさきのにほへる妹」　85
3―壬申の乱の幸と不幸　95
第4章―宮廷伶人の流れ―人麻呂と赤人と―――107
1―宮廷伶人―巫祝と歌人の間　108
2―人麻呂の宮廷讃歌　114
3―赤人の発想　131
第5章―妻争伝説の謎―神に仕える女性たち―――145
1―菟原処女と真間の手児奈と　146

2―桜児と縵児と　159
第6章―民衆の生活―『万葉集』の社会的背景―――171
1―役民の労苦　172
2―衣食住―人麻呂歌集の旋頭歌から　179
第7章―東歌・防人歌の風土―東国文化の特質―――185
1―東歌・防人歌の世界　186
2―東歌・防人歌の父と母　201
3―武蔵国の歴史と風土　209

序章——天の香具山の風土——『万葉集』をどう読むか



平城宮跡出土のひとがた（奈良国立文化財研究所）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

民族の絶唱——万葉の歌

『万葉集』の歌を愛誦歌としている人々は多い。日本人が万葉に憧(あこが)れる心は永遠である。いわば『万葉集』は民族の古典なのだ。〈まこと〉の心で貫かれたその世界は、日本人の魂のふるさとであり、心の古典であるといえよう。

そうしたわれわれの祖先が伝えてくれた古典中の古典でありながら、『万葉集』は、中学や高校の教科書などのように、ほんとうにマンヨウシュウと読んでよいのか、マンニョウシュウと読むべきなのか。また、だれが、いつ、どこで、なんのために、編纂したのか。そうしたもっとも基本的なことさえいまだに明らかでないのが実状である。また、万葉の名歌は、たしかに〈民族の絶唱〉といわれ、いかにももっともらしく解釈され鑑賞されてはいるが、その多くは謎だらけなのである。

実は、それが当然のことなのかもしれない。第一、万葉の時代の人々の生活——とりわけ信仰や言語といったものばかりでなく、婚姻や旅の方法も住居や衣服の構造も、今日のそれとは大きく相違するうえに、地理的風土まで変貌しているのであるから……。万葉びとが若返りの霊水を秘蔵するとして憧れたあの神秘なる月——いまやその月の世界に行って石を採取してくる、それを茶の間のテレビで見ている、という現代人の感情で万葉の歌がそのままわかるということが不思議なのである。万葉の「歌」を、文学としての自覚のうえに表白された「文学」と決めこんでしまう前に、万葉びとにとって「歌」とは何か、という根本的な問題に立ち返っ

てみなければならない。

いわゆる万葉名歌の中には、生活と文学とが、あるいは儀礼と文学とが、未分化の状態のままに歌われている詞章であるところに、万葉の名歌たるゆえんがあるものが多いのではないか。こうした歌は、文芸学的にみるだけでなく、民俗学的に、また歴史社会学的に、綜合してみることが必要であろう。わたくしどもは、まず万葉の時代における社会や生活の諸相を正しくとらえ、万葉の風土をよみがえらせながら、その歌に血を通わせていかなければならない。

ここに、『百人一首』にも採られて、だれでも知っている名高い持統天皇の歌をとりあげてみよう。

「白たへの衣」

春過ぎて夏来るらし　白たへの衣干したり　天の香具山　（巻一の二八）

この持統女帝がお詠みになった「白たへの衣」は、いったいなんの衣だったのであろうか。春が過ぎて夏がやってきたに違いない、と推量した根拠を、白い衣が干してある、というところにだけ求めれば、それは春から夏への「衣更」のための衣とすることが自然なようにみえる。その「衣更」説が今日の通説になっているのであるが、はたして正しいであろうか。わたくしにはどうにも疑問でならない。それは白い衣が干してある場所、すなわち「天の香具山」に対する持統朝の人々の気持をまったく無視した解釈だからである。

たとえば、室町期における万葉研究の代表的成果の一つである由阿の『詞林采葉抄』（一三六六年成立）には、この山に甘橿の明神が祀られており、衣を神水に濡らして干すことによって、人の咎の虚実をただすという信仰が伝えられている。神水で濡らした衣が乾くか否かによって虚か実かを判断したのであろう。由阿はこの伝承によって説こうとしているわけではなく、わたくしもまた同じであるが、室町期に「衣更」とは無縁のことが考えられていたことを示すおもしろい伝承である。

とにかく、この「天の香具山」は、大和朝廷、とりわけ持統朝にあってもっとも神聖な山であり、その麓には「埴安の池」もあったのであり、衣がえのための衣を干すというようなことはとても考えられない。もっと具体的に持統朝前後における香具山の風土を復元してみなければならない。

香具山の風土

香具山は、畝傍山・耳成山とともにいわゆる大和三山の一つで、その中央部に持統女帝によって藤原宮が造営され（六九四年）、中国の長安・洛陽の都城制を採用したわが国最初の本格的な都京、藤原京が形成された。「藤原宮の御井の歌」（巻一の五二・五三）に歌われるように、東に香具山、西に畝傍山、そして北に耳成山というぐあいに、それぞれの境の鎮めとして三山が存在している。この三山伝説の歌については、第3章「壬申の乱前後」で述べることにしよう。

香具山は、多武峰山塊の麓にある侵食残丘であるという。畝傍・耳成両山が孤峰であるのに対して、いかにも談山神社が鎮座する多武峰の端山のように見える。端山とは連山の端にある山のことで、その麓で生活する人々は、天上の神々が、高い山からこの端山を一つの依代にして里に訪れると考えていた。

とくに、鴨君足人が奈良遷都（七一〇年）の後、その昔を偲んで作った歌か、というつぎの歌に明らかに伝えられるように、その麓には大きな池があったことは注目しなければならない。

鴨君足人の香具山の歌一首短歌を并せたり

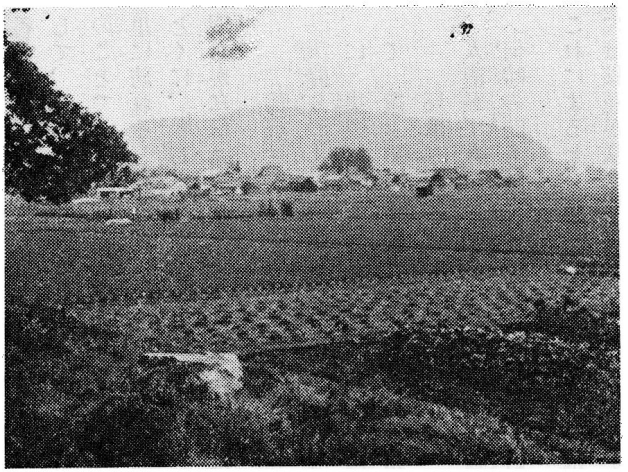
天降りつく　天の香具山　霞立つ　春に至れば　松風に　池波立ちて　桜花　木のくれ茂に　奥辺には　鴨妻呼ばひ　辺つ方に　あぢむら騒き　ももしきの　大宮人の　まかり出て　遊ぶ船には　楫棹も　無くてさぶしも　漕ぐ人無しに

反歌二首

人漕がずあらくも著し　潜きする鴛鴦とたかべと船の上に住む

何時の間も神さびけるか　香具山の鉾杉がもとに苔生すまでに　（巻三の二五七～二五九）

これによると、香具山の麓には水鳥が飛び交い大宮人が船遊びするかなり大きな池があり、山には桜花が咲き松や杉が生い茂り、いかにも神々しい山であったことがわかる。この池が実



藤原宮大極殿跡より香具山を望む

は「埴安の池」であって、そのほとりには高市皇子の御殿があったらしく、柿本人麻呂が皇子の殯宮挽歌（六九六年没）に、「埴安の御門の原に……」と詠み、反歌の一首に、

埴安の池の堤の隠沼の　行方を知らに　舎人はまとふ　（巻二の二〇一）

と歌っている。

現在、香具山はその麓を自転車でも巡ることができる。わたくしもその昔の風土を思い、古老の話に耳を傾け、木蔭に休んでは考えをめぐらす、ということを何度か繰り返した。そのたびにわたくしの想像は大きくふくらんでいった。

実は、香具山の南麓に「南浦」の町名が伝えられる。南浦というのであるからその北に池があったことを思わせる。そしてその鎮座地に疑

問がないではないが、西麓に「哭沢の杜」（畝尾都多本神社）や「畝尾坐建土安神社」が伝えられる。要するにその池は「埴安の池」であり、その水の神を祭るのが哭沢の杜であったに違いない。哭沢とは、水が音をたてて湧き出しているところであろう。埴安の池は、香具山の南麓から西麓にめぐっていたと推定される。さらに北麓には「古池」が水をたたえており、その東に「東池尻」の町名が伝えられる。あるいは、埴安の池が古池とひと続きであった時代があるのかもしれない。そうすると香具山は、南麓から西麓、さらに北麓にわたって埴安の池がめぐり、その東の池の尻が「東池尻」だったということになる。

国見の山　多武峰の端山である香具山は、その麓を大きな埴安の池でめぐらされていたのであった。この池のむこうに鬱蒼と生い茂った山、しかもその背後が遠く多武峰に連なっている。こうした水のむこうに生い茂る端山こそ、わが万葉びとが高天原の神々の依代と信じた聖なる山かげであった。だからこそ香具山にはとくに「天の」という冠詞がつき、「天降りつく」という枕詞も用いられているのだ。万葉には実にたくさんの山々が登場するが、香具山のように、「天の」という冠詞を添えて表現される山は他に例がない。これは注目しなければならない。

『釈日本紀』が引く『伊予国風土記』には、現在の温泉郡石井村の「天山」を「天の香具山」の片割れだと伝えている。天上の世界からこの国土に山を降ろしたときに、二つに割れて片方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong